

---

# 名人

らんこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名人

### 【Zコード】

Z2437D

### 【作者名】

らんこ

### 【あらすじ】

天真爛漫な性格の持ち主の松宮にドライブに誘われた日高は国道をひた走り、喫煙タイムのためドライブインへ。ドライブインでいつものように喋る松宮がいつもの松宮ではないと感じ始めた日高。衝撃の事実を知らされても自分の立場と役割を全うしようとするのだが、日高はなにか松宮のためにしなければならないと感じ始める。

」の形式はよくある恋人同士のドライブなのだろう。でも、実際今助手席に同乗する女性は俺の彼女ではない。

「そろそろ休まない？ 一服したいし」

とお隣さんは言った。煙草を吸わない俺にはそんな理由は要らぬいのだが、そろそろ一時間経つ。休憩どきではある。

「よし、どこかで休憩しよう」

と、決めたのだが、なかなか休憩施設は見当たらなかつた。高速でもないのでサービスエリアは期待できない。今走る道は国道だ。それならいはずれドライブインや道の駅でもあるだろう。

程なく山間の少し開けたところに出た。ドライブイン蘭子と看板が出ていた。駐車場も広く、店構えも真新しい。

「見つけた」とつぶやくと俺は車をドライブインに滑りこませる。

「ねえねえ日高」

停車させるなり、隣の女性は俺の名を呼ぶ。

「なに？ 松富」

今横にいる女性の名前だ。

「煙草無いんだけど……」

松富はいつも持ち歩いている大きめの黒かばん。多分どこかのブランド物だろうそれの中を覗き込んでいた。

「知らないよ。店に売ってるんじゃないか？」

「もしかしたら？」

「……わ、わかつたよ。店を変えればいいんだる」

俺は少し怒り気味で運転席から出てドアを閉めた。松富のわがままにはあまり相手にしないほうが良いということはこれまでの経験

上勉強済みなのだ。俺はスタスターと車の鍵も掛けないまま店の入口に入る。風除室の隅にちゃんと煙草の自販機がある。心配の種はすぐく消えた。

冷房が程よく効いた店内と高地という場所柄が相まって休息の場所にはもってこいであり、窓からは樹海が望める。ベストビューオーを眺めるテーブル席を選び景色に見とれる。なんか壮大すごい。しばらくして煙草を手に松宮がやつてきて、さらに店員が注文をとりに来た。松宮はさつそく煙草に火をつけてからメニューをチラ見してサンドイッチとコーヒーを、俺はコーヒーだけを頼んだ。一時の沈黙のあと煙草を揉み消すと松宮は喋りだした。

「あのさ、今日、あんたを誘つたのは深いわけがあるのよ」  
相変わらずの松宮節が炸裂していた。今回も言いように付き合わされるのだろう。

「でさあー、あんた『名人』って聞いて何か思い浮かぶものってある？」

「『名人』ねえー、急にどうしたの？ 今回はそれがタイトルかい？」「いいえ、まだ決めてはいないんだけど、ちょっととした前振りかなあ」

「ふーん。『名人』か、たしか、左官名人てのがいたような。テレビで前に観たよ」

「他には？」

「書道の名人！」

「他は？」

「推理の名人とか？ なんだよ。さつきから」

「まあいいわ、何事にも名人っていうのはさ、なにか物事を極めた人物を指すのよ。モノマネ名人、「コロッケ」将棋の名人「羽生善治」手術の名人「ブラックジャック」、収納名人、ビリヤードの名人なんてのもいたつけ。まあーどぞのつまり、ある分野の最高の人を指すんだと思うわけ」

「田高の言つそれも私の予想してたとおりの答えよね。ちょっと満足かな」

「なんだよ俺を試すみたいな感じ」

「まあー。 そんでね、 今回は殺人の名人が出てくるサスペンスを書こうかなつておもうわけ」

「サスペンスを書くの？なんか松富のイメージとは違うよね」

「そう？確かにサスペンス書くのは初めてよ。でもなんていふか新境地？それを開くつていうのが今私には必要なわけよ。だからサスペンスに決めたの」

「うーん。サスペンスつてなんかありきたりだと思つた」

「ありきたり！ そんなんふうに思つるのはあんたがサスペンスおたくだからよ」

「おたくまでいつてないとおもうけど」

「まあ、あんたはおたくつて柄ぢやないわね。 なんていうか、おたくにもなりきれてない一番たちの悪い部類…」

「までよ。今はそんな話関係ないだろつ」

「まーあ」

松富はまた煙草を一本取り出して火をつける。 いの店にきてからすでに一本目。 ヘビースモーカーの松富はうまそうに一口思いつきり吸い込むと満足げな顔をして煙を一気に吐き出した。 物書きには

愛煙家が多いというが目の前の松富も例外ではないのだ。その点、サラリーマンである俺はまったくタバコは吸わない。

「でもあんたを誘つたのは……。わかるでしょ?」

「…」

「腐つてもあんたはサスペンスに強いわ。だから、ちょっと助言してほしいわけよ」

そういうことか。毎回俺を誘つては「この本どう?」と書き上げたシナリオを俺に見せて意見を求めてきた。松富にとって俺は下読みをしてくれる便利な友人でしかない。今回はどうとうシナリオを書くに当たつての助言まで求めてきた。うーん。なんか松富と俺の関係が狂つてきてるようだ。

「ちょっと聞いてる? あんたまたボーッとしてるじゃない。ほんと、あんたよくそれでここまで運転してきたわね…」

「おーおー、そんな俺を君は誘つてドライブ行こうとか言つたんだろ?」

「あらあら認めちゃった」

もう、この松富の言動には手がつけられん。

\*

一年前の秋だった。俺は待ちに待つた某大御所人気作家の書き下ろし発売日だあ!。と朝からそわそわしながら営業まわりをしていた。そして十時になると書店に駆け込み平積みされた新刊を手取つたのだった。俺はすぐにでも読みたい欲求を抑えながら近くの公園へ駆け込み、ベンチに座り読み出したのだった。

至福の時が俺に訪れた。なんとも天気も良く爽快な読書日和だった。そして、物語も終盤になるころ日が暮れてきたのだった。仕方なく一旦会社に戻り、仕事の後始末をしてさつと自宅に帰ろう。俺は公園を出た。

そのとき、声を掛けられたのだ。

「田高君」

声がした方を向くと取引先の会社の名は忘れたが顔は良く知る部長がいた。そしてその横に立っていたのが、彼女だった。

「おお、こんなところで会うなんて奇遇だね」

「はつ。『苦勞様です』

「はつはつ。相変わらず固いねえ。ところで今から暇かい？一杯どう？」

「一杯ですか？」

正直酒は好きなのだが、今晚はあの新刊を読みたい気分だった。どうしようかと迷っていると、隣の彼女が声を掛ける。

「田高さんでしたっけ？これからどうですか？少しは仕事のこと忘れて飲み明かしたり？」

「はあ」

茶髪のショートカット、白の長袖のワイシャツにジーンズ。顔立ちは美人の部類に入るのだろうが、まったく色氣の無い女性だなあと第一印象であった。

「まだ仕事？」

「いいえ、もう終わりですけど…」

そう言つてしまつともう決まったようになどこの部長は言つ。

「じゃあ決まりだな。それでは田高君行きましょう」

仕方あるまい。読書は先送りとしよう。

3

その頃とまつたくと言つていいほど変わらない風貌の松宮。煙草をふかふかとふかし、煙の輪つかを次々と作り出す。と、松宮と田高が合つてしまつ。うわー怖い顔になつてゐる。

「田高君。ちょっと、怒ってる？」

「はあ？怒つてるのは松宮の方だらう」

「怒つてないけどさ。松宮、その一、本題に行かないか？」

「おっ、やる気になつた？」

「やる気になるもならぬにも、そのシナリオの話をしないと帰らないだろ？」

「勘がいいじゃない。じゃあ言つわ」

「ちょいど、間を持たずよつて店のねばねがサンディッチと『一ヒー』を運んできた。

松富は煙草を力強く揉み消す。一本の吸殻が並んだ。

「サンディッチ食べていこわよ」

「ああ、有り難う」

そうして俺は一片のサンディッチを口に放り込む。ドライブインの喫茶店にしてはバターが効いていて美味しい。

「それでね、あんたには私の考えてるあらすじを聞いて欲しいのよ

「あらすじ？」

「そう。書いてもいらないんだから仕方ないわよ」

「それじゃあ一ちょつとそれは俺の出る幕じゃないよつな話があるけど」

「書く暇がなかつたのよ。それより、ちよちよつと聞いてあれこれアドバイスしてくれればいいのよ」

「そんなのでいいのか？」

なんか今までの松富とは一味違つよつだ。形にもなつていないうち点でアドバイスを求めるなんて今までに一度もない。

「いいのよ。まずね。私の考えるシナリオの題名。『煙草殺人事件』

「…」

「あのね、なんか言つひ」とないの？」

「言つこと、そんなもん題名でなにを判断できるんだよ」

「あり、言つわね。でも大概サスペンスつて題名で内容がある程度わからぬ」と駄目じやない？」

「そんなことないと…」

言つかけて松富の言つことも判らないでもないと思つて至る。うん。

確かにそうだ。今まで考えたこともなかつた。

「煙草つてつくんだから煙草が殺人事件に大きく影響しているわけ。あらすじはこうよ。

あるヘビースモーカーの男がいるのよ。何十年と煙草を愛する愛煙家。でも隣に住んでいる人は煙草が大嫌い。伏流煙が怖くてしがいないの。そして殺人を犯してしまう

「まつ待つてくれよ。伏流煙が怖いだつて? ちょっと無理があるよ

うな」

「死体は押入れに隠すんだけど、数日後友人が死体を発見。それから刑事が出てくるのよ」

松宮は俺を無視して喋り続ける。多分なにがあるのだろう。いくらなんでも殺人の動機が煙草の伏流煙じや三文ミステリもいいところだ。

「刑事はどびつきりの一枚目俳優でエリートの警視庁勤務。腰巾着は対照的な三枚目?まあー、居ても、居なくてもいいけどね。それで、死体を検分して、刑事たちが聞き込みにまわるわけ、もちろん隣人にもね。それで目撃者は居ないか? つて訊くけど、やっぱり犯人は白を切るの」

なるほど。なんか松宮の意図が見えてきたように思う。つまり、伏流煙なんかで殺人を起こさないという常識が捜査を混乱させるということ。

「で、捜査会議では被害者の身元、身辺を洗うけどいたつて曰ぼしい報告は上がつてこない。で、捜査会議の終わりに凶器が判明するわ。珍しいアーミーナイフがね。それから捜査はとんとん拍子に進み、購入者がわかるわけ。隣人の犯人がね。そしてめでたく逮捕。犯人を追い詰める刑事。追い詰められた犯人は淡々と自白して自殺を図ろうとするんだけど、阻止するエリート刑事。そして刑事は言うのよ。『煙草はやめたほうがいいなあ』ってね

「まさか終わり?」

「そうよ」

「これで終わりか?」

「なによ」

俺は呆れていた。松宮はほんとにミステリとこののを知らんらし  
い。こんなので観客は喜ぶか？

「最後のセリフがマズった？ そしたら…」

「いいや。いいんだ。そこじゃないんだ。俺が気になつたのはね。  
煙草の煙が嫌いで人を殺すのかつてこと。そんな犯人いるかあ？」

「そう？ 私はよくわかんないけど、吸わない人は嫌いでしょ」

「でも、嫌いで人は殺さないだろう。そしたら、松宮はもう何回も  
殺されているよ」

「ああ。 そうよねあんたに八つ裂きにされてやう」

「…。はあーなんかミステリを冒頭してるようなあらすじだつたよ。  
俺が指摘しなきゃ書いてた？」

「書きはしないけど、だつて話に山が無いし。まあ、話しの種があ  
と二、三個あればいい話しになつてたかもね」

「松宮、とにかくだ、今のあらすじでシナリオは書くな。これは俺  
のお願い」

「没つてことー。そつか。まあ、いいわ。次のあらすじもあるから  
「えつ？」

「そう、まだ案があるのよ。ちょっと思考を凝らしているやつがね。  
今はやりの少年の犯罪」

まだ考えていた話があつたとは。というか、さつきの煙草殺人事  
件は松宮風のジョークだったのか。多分このドライブインに入る前  
にでも思いついたんだろう。まったく、松宮は俺をからかつて遊んで  
いる。それが俺にはわかつた。

「まず、舞台設定だけど、ある小学校が舞台なの、登場人物は六年  
生の男の子と同じクラスの女の子、それに先生ね。あと幼馴染の女  
の子。タイトルはその名も『紙飛行機殺人事件』ちょっとよくない  
？」

「よくないとか言われてもなあ」

タイトルはなんかちょっと子供向けでいいかもしね。松宮つ

ぽいといえば松宮つぽいのだ。そう。松宮は子供みたいに身勝手で天真爛漫な女性なのだ。

\*

青色の蛍光色が光る今流行の居酒屋に連れてこられた俺は困惑しながらもどこそかの部長の後をついていった。予約をちゃんとしていたのだろう。客の入りは多い居酒屋の奥座敷でもいうのだろうか、仕切り壁に囲われたテーブル席がちゃんと空いていた。

「うわーす」「いわ

「ここはな。私が接待に使う得等席なんだ。おしゃれな雰囲気でいいだろ」「…

「ほんと」

彼女はまるで子供みたいに喜んでいる。確かに、御影の大きなテーブルに紅色のソファーア。壁にはモダン的な絵が掛けである。一見居酒屋には見えない。というかソファーで飯が食べれるのかという不安が出てくる。

「田高君、面食らってるねえ。無理も無いかな。まあ座りなさいよ」「はあー」「

俺は部長に上座を勧め、彼女を部長の対面に勧め、下座に座った。となると隣は彼女だった。女性のいい香りがほのかにする。そろそろ横顔を見た。笑顔だった。

「あのーいいんですかこんなお店に俺なんかが

「いいんだって、田所さんが誘つたんだし、おこりなんだし。田高さんも遠慮することないよ」

彼女がこう突つ走つた。部長はうんうんと笑顔。ああ、田所さんだつたか。今になつて俺は田所氏のことに思い出す。

六本木の一等地にオフィスを構えている企画制作会社アートサンの部長だ！コンサートやら、イベント、はたまたテレビ関係の仕事まで幅広く手を出している。ここ数年は仕事も多く上り調子。

「さあ、頼みなさいよ。私はビールから。松富さんは？」

「私も」

「田高君は？」

「同じもので」

と、皆と同調したところで俺は隣の松富という名の人物について推理し始めていた。とはいっても、初步的なことでどんな職業の人なのかを考えていただけだ。

田所氏の多分下請け会社の一つだらうというのは田所氏の軽い口調で予想できるのだが、俺の推理力はさしく当初はそこまでだつた。ジールが運ばれて、有無を言わさず田所氏が乾杯と言い。三人ともぐいっと飲む。そして俺は丁寧に切り出した。

「田所さん。いつもお世話になつております。これからも宜しくお願いします」

「おいおい、そんな堅苦しいのいらんよ。まあ、田高君のところは対応が早いしこれからも頼むよ」

「有り難うござります」

「田高君、ここは松富さんもおられるし、柔らかくな。それに俺が強引に誘つたんだ。別に畏まんなくたつていいよ」

「いいえそんな滅相もありませんよ。で、松富さん。お初にお目にかかります。私こういうものでして……」

俺は中腰になり名刺を松富さんに渡した。目を見ると彼女は今にも噴出しそうだった。

「ちょ、ちょっと。たまんない。なにそれ。はっはは……」

思わず俺は田所氏に顔を向けたが、田所氏も笑っていた。俺は何か失態でもしてしまつたのかと寒気がした。

「田高さん。なにその礼儀、誰に習つた? 考えた? はっはは、信じられないわ。今時こんな挨拶なんて」

「そうだな。ちょっと田高君は固いね」

「おもしろーい。田高君。それと、会社さぼつて公園にいたでしょ?」

「あつ！」

「なに『あつ』って。当たつてたのね。適当に書つたのに」

「そ、そんな」

「おーおい、松富さんそんなに日高君をいじめるなよな」

「いじめてなんて…。田所さんも私が悪女だとでも？」

「そりゃないか。裏表のある女性だからね」

「わへ、何を言つて。あ、日高君もそんな風に見てる？失礼ね」

「そ、そんなことありません。決して…」

「はつはつははつは」

まさしく俺はいいようにもてあそばれていた。中腰のまま俺は動かないでどれだけいたるうか。

「座りなさいな。日高君」

田所氏のその言葉が無ければ俺はヘルニアをそのとこ賣つただろう。

「さあ、田高君飲みなさいな。今日は単なる飲み会だと思つてね」

「有り難うござります」

「つむ。それでね、松富さんはな、これから私のところの稼ぎ頭になつてもらう貴重な人材なんだ」

「と、いつと社員の方？」

「いいえ。違うわ。日高君。私はシナリオライターなの。つて自分で語つのなんかこいつ恥ずかしいんだけどね。たいしたシナリオライターじゃないし」

「そんなことありません。シナリオ書くんですか？す」「こですね」「す」「くも無いけど」

「いいや、松富さん謙遜しているなあ。私が思うに松富さんは才能を持っているよ。あのね、日高君、彼女は今まで劇団のシナリオを書いていたんだ。映画の脚本も書いている」

「自主制作映画の脚本を手伝つただけですよ」

「いいや、あれはほとんど松富さんの世界観じゃないか。だから入賞できただんだ」

「褒め過ぎです」

「で、田高君。彼女に田をつけた私がだね、彼女とタッグを組むわけだ」

「コラボレーションですね」

「うん、それだ。今度の舞台の本を彼女に頼んだ。その前祝がこの飲み会というわけだ」

「それはおめでとうござります」

「いいえ、別におめでとうだなんてね。まだ成功したわけじゃないし」

「いいや松富さんならいいもの書くよ」

「もう、田所さんて持ち上げるの得意ですねえ。それでいい気に入る私も私だけだ。でも、田所さん。今度の舞台は今までの規模のとは違うし、失敗は許されないし気合入っちゃう。よし、がんばろっ！」

「うん。その心意気、期待してるよ」

とそんな具合に俺はようやく松富の職業を知りえたわけだ。まさかシナリオライターなんて職業の人に知り合つ俺がここにいるとはそのときは信じられなかつた。が現実なのだ。生粹の読書家の俺がうれしくないわけがなかつた。

「松富さんはどんな舞台のシナリオを書いているんですか？」

「へえー田高くんは興味あるの舞台とか？」

煙草を取り出しながら松富は言った。

「そんなに興味はあるわけじゃないんですけど、観た事も数えるほどしか…」

「あら、そしたら今度の舞台を観に来れば？ねえ田所さん」

「はは。そうだな。しかし、まだ何も書いてない君がそんなこと言つていいのかね」

「任せてくださいよ。多分私の代表作が生まれるわ」

「『雲の切れ間』みたいなのかい？」

「まーあ。コンセプトは『雲の切れ間』をもつと大きくしたような

のを書こうかと…」

松宮は煙草に火をつけてスーっと音が鳴るくらい「コチンを吸い込んでいた。結構な喫煙者だとわかる。

「それが松宮さんの代表作ですか？」

「煙草を嗜んでいる最中で間が悪かつたのか、口は動かさず、目配

せで俺に答えていた松宮。それを見かねて田所氏が答えてくれた。

「そりなんだよ。日高君。先も話した自主映画のタイトルなんだがね」

「どんな話なんですか？」

「うーんとね。松宮さんが説明したらどうだ？私が言つてもねえ。書いた本人の本分でないことをいいそうだ」

「あら。私が説明を？簡単に言えば高校生の恋愛物語よ。映画観た方が早いわ。今度ビデオ貸してあげる」

「あー。それはどうも」

初対面の女性と早くもビデオの貸し出しの約束？その状況が俺には唐突過ぎて面食らつた。

4

後日観たその自主制作映画は良く創られた青春映画だった。主人公の女子学生が親の離婚騒動にも負けず、活発な学校生活を送るという、感動も、恋愛もある映画。

そう。松宮の書くシナリオの多くは恋愛物語に感動をプラスしたような話がほとんどだ。

「紙飛行機の折り方を教わる小学六年生の男の子から物語は始まるわ」

「へえー」

「教えるのは幼馴染の女の子。夕暮れの放課後の教室で幼馴染は言うの。『負けちゃいけない』ってね」

「うん」

「実は冒頭のそのシーンは時間的には後半のくだりなのよ。それから男の子の話が始まる。いじめられる男の子の話がね。いじめられたはじめ軽いものなんだけどどんどんエスカレートしていく。目も当てられないくらい辛いものもね。でも精神的に強い男の子は耐えるわ。そして片想いもする。同じクラスメイトの女の子に」

なんか松富らしい話だと素直に思った。これが彼女のシナリオ！「クラスでいじめられる男の子に唯一何も思わないのがその娘なのよ。その娘の目に強句惹かれる男の子。ある意味好きなその娘がクラスにいるから耐えているといつてもいいくらい」。

男の子は強いわ。いじめに耐え続けることが恋を叶えられると信じているよに……。で、ある日、男の子は告白をする。ラブレターを下足箱に置いてね

「結果は？」

「返事は当日の放課後に言われるの『好きじゃない』ってね。ラブレターをつき返されて呆然とする男の子。そこに幼馴染が彼を見つける。幼馴染には失恋で呆然となっている風には見えなくて、いじめでもう泣きそうになっているのかと思う。一瞬躊躇して、男の子に近づいて励ます。『いじめに負けないでね』って。でも片手に持つているラブレターを見た幼馴染は悟るわ。でもね一環して『いじめには負けないでね』と言う。それから幼馴染は男の子に紙飛行機の折り方を教え窓から飛ばす

「それが冒頭の？」

「そうよ。で、男の子は決意するわ。いじめっ子を殺してやるうど。殺し方はこいつよ。朝早くに登校して紙飛行機を折つておく。そしていじめっ子が登校してたら三階の教室から紙飛行機を飛ばすの。紙飛行機がいじめっ子に当たって死んじゃう」

「……」

「もちろん紙飛行機の先には針でもくつつけおくわ

「……。それ本気？」

「ああ、忘れてた。針の先には毒が塗つてあるの相当強いやつがね。俺は呆れた。というか松富の田が結構本気だったのにも驚いてたんだが。

「そもそも、紙飛行機を凶器つてのは新しいよな」「でしょ？」「でしょ？」

冷やかしのつもりで言つたのにこれだ。

「しかしだね、松富女史。そのミステリは成立しないだろ？」「ミステリ？ ああ、サスペンスのこと」

「そうだ。そうなんだよ。松富の目標とするサスペンスは、紙飛行機が凶器になりうるという。それも三階から飛ばせばちゃんと人に当たるんだ。そんな」都合主義が通るサスペンスなんてない！ 俺は言い切るよ」

「なによ…それ…当たらない？ 当たる場合もあるでしょ？ テレパシーで人殺すとかじゃないんだけど」

「また、『テレパシー』って。確かにテレパシーよりか確立はあるだろうがね。現実に沿つて考えてくれよ」

「なによ、フィクションの世界に現実的なことばかり考えていたら面白くないわよ」

松富の言うことももつともである。言葉が詰まつた俺だが、今言いたいのはそれじゃがない。そもそも松富にはミステリのいろはを根本から教える必要があるようだつた。

「ぐうの音も出ないようね」

松富め。だが、ここで俺がくじけては松富のためにはならないだろ？

「『紙飛行機殺人事件』動機という面では申し分ないと違うよ松富。煙草のやつよりか何倍も人を殺す動機になりえる。でもね、凶器が問題なんだ。わざわざタイトルを凶器に使う必要もないし、もつと別のやり方を考えた方がいい」

「あんたが言いたいのは、紙飛行機じゃ駄目ってこと？ もつきも言ったけど、いじめっ子に当たる確立はあるわ」一パーセントでも確立

があればそれは起こりうるんだから

「おいおい、確立じやだめだよ。じゃあ一回田が当たらなかつたら一回田もあるということか?」

「やうよ。とこりがもともと一回田で当たるのよ、まさかつてのが本当に起つのがこの世の常よね」

松宮はすぐにそう答えた。そこまで言い切られるといひからも困る。うーん。とりあえず全部聞き出す必要がありやうだ。

「当たるとしようか。ああ。当たるとするよ。するとわあ。凶器は紙飛行機だ。それは男の子が折つた紙飛行機なんだろう?」

「やうよ。他に誰がいるのよ」

「はあー。もう犯人は判つて御用だね。でも小学生だから罪には問われない。でも世論が黙つちゃ いない」

「ふふ。ちょっと口高の読み、違つわ。彼は捕まらないのよ」

「捕まらない? 男の子が折つたんだろう?」

「紙飛行機に指紋が付いてなかつたら?」

「手袋でもして折つたとでもいうのか?」

「やうじうこにしといて。それよりもっと重要なことがあるの。男の子は他の子の机から抜き取つた紙で飛行機を作るの。その子は幼馴染の娘ね」

「えー」  
「なにが『えー』よ」  
松宮は口をあんぐりと開けて多分俺の真似をしたらしく。そんな馬鹿みないな顔してたのか俺?

「だから警察は幼馴染の娘に事情を訊くけど、幼馴染は認めちやうのよ」  
「な、なんか嫌だな」  
「男の子がやつたのに幼馴染が認めるものだから、男の子は自分を責める。周りのクラスメイトも薄々感づいている。いじめはさらこうぐくなる」  
「…」

「男の子は罰を求めるわ。いじめられ続ける。幼馴染は不登校。そしてイケメン探偵」

「…」

「あら何も言わないの？」

「ここでもイケメンってのに呆れてるんだよ」

「でも、田高。事件は解決しないといけないでしょっ。」のままじやいじめが続いて終わる。話が重過ぎるわ

「ああ、そうか。わかったぞ。この話もまた松宮が適当に考えたんだろう？」

「ばれた？ っていつか。またって。煙草のやつもばれてた？ あんた勘いいわ

「どうも松宮はいつもふざけるのか。いらっしゃへる。

「じゃあ次だけど」

「待て！ もういい加減にしてくれよ…」

「どうも今回は勝手が違うようだ。いつも松宮はシナリオの話よりも別の話をしたがっているのではないかと思えてきた。いつもは本題をズバリと言つたり訊いたりするのが松宮なのだから。今日のよつてふらふらと筋がないような話をする彼女は本当の松宮ではない。

そう、じいていえば俺と松宮がテーブルで向かいあつている状況、これは松宮が書いてきたシナリオを『ドン！』と置いて「読んでみて」と言つ。これが通例なのだ。

\*

「どう？」

「はあ、どうと言われましてもよく書けてるなあとしか言いようが

…

「田高君は本が好きなんでしょう？ もつと具体的な感想はないのかしら？」

「…」

正直俺は今この状況に慣れていなかつた。

例のビデオを貸してもらつてから。いや、一方的に郵送で送りつけられたビデオを観て数日後。ビデオを返そつと昼時を狙つて喫茶店で松富さんと待ち合わせしたのに松富さんは俺に会つなり「ちよつとこれ、読んでみて欲しいんだけど」と俺に書きかけの冊子を突き出したのだった。思わず返事をしたのだが「今ここで読んでよ」というのが松富さんの希望らしく俺は飯を食べる間もなく読んだのだった。

で、読み終わると午後一時を回つていた。俺は一時に得意先とのアポを取つていたのを思い出す。せつかく松富さんと一人での食事だつたのに、時間が無駄に経つたように感じていたそのとき。松富さんは俺が読み終わったのに気付いたのだろう。すでに吸殻で一杯にした灰皿に吸いかけの煙草をねじ込みながら声を一時間ぶりに発したのがそれだった。

「田高君がかなりの本好きだと自負していたからこそ私は今日ここにそのシナリオを持つてきたわけ。昨日は徹夜で寝てないんだから」「そ、それは大変で…」

「だからさ、もつとためになることを言つてくれないと私の努力が報われないわけよ」

なんという言い種だらう。確かに俺が本好きだというのはあの初対面の居酒屋で酔つ払つた勢いで言つたかもしれない。それに脚本家のシナリオというのにも興味はある。が、俺は素人だ。今現在プロである松富さんがそんな要求を俺に求めるのは酷というもの。まして昨日徹夜だったから? 身勝手極まりない! そんなのはそちらの都合だ。それに今ここで俺と松富さんが待ち合わせした本題はビデオを返すということ。

「あのー。私が松富さんのシナリオを手直し? ということですか?」

「それ以外になにがあるつていうのよ」

松宮は怒つているみたいだ。俺を睨み付けている。だがなんか可愛げがある。

「わかりました。松宮さんがそこまで言つならね、俺にも意地があるってもんですから」

「何の意地よ。わけわからんないけど」

「本好きの意地ですよ！」

そうして俺はシナリオの冒頭から終わり隅々に至るまで自分の意見を言つた。登場人物の設定がおかしいとか、ここの中の表現はつじつまが合つていないとか。それを松宮は素直に聞いていた。ちょっと言いすぎたかなと俺も思わずにはいられなかつたのだが、俺のプライドにも関わつたし、さらには言えれば、松宮に一度ぎやふんと言わせたいという気持ちがあつたから。そう！ 言い切つたのだ。

そして時間は一時を回つていた。ああ、得意先から怒られるんだろうな。

「ありがと、あんたに見せて正解だつたわ」

松宮は素直だった。と思つたのはこの一瞬だけだ。

「指摘したところのほとんどは使えないのばっかりだけさあ、最もな部分も幾つかあつたわ。ちょっと参考にさせてもらひつ」  
一言多いのが松宮という人物なのだろう。よほど懐が広くないと対応できないと肝に銘じた俺がいた。

「使えないところばっかりでした？」

「そうよ」

「……でもね、松宮さん。一番私が言つたかつたところですけど、チヨイ役で出る子供たちつてのがね。ほんとにチヨイ役で話の本筋にも絡まないのが、気にかかつて……」

「ああ、あれ。なんか田所さんのお客さんの子供を出でしてあげてくれつてね。まあ、よくある話よ。気にしてちやなんにもなんないしさ」

「ああ、そんな話本当にありますね」

「そうよ」

そういうたとこにはちゃんと譲る松宮。違う一面を見た気がした。  
「それよりさ、田高君。主役の釣り師なんだけどさ。どう思つた?」「  
はい、結構いい奴ですよね。なんか考え方が前向きで」「  
「そうよ、好い人なのよね。イケメンだし、気が利くし  
…イケメンなんですか」

「そう。顔合わせのときに会つたんだけど、いい男なの」

「ふーん」

「あれは相当もてるわね。うん、そうに違いないわ。さすがに今売り出し中の俳優だけあるわ」

どうやら松宮はその俳優がお気に入りらしい。というか好きなんだろう。明らかにそんな口ぶりだつた。俺は複雑だつた。  
「舞台成功するといいですね。観に行つていいですか?」「  
「了解!初日に来てよね」

「はい。じゃあ俺そろそろ行きます。ビデオ有り難うございました」「もう行くの? そうだ、田高君またあんたに意見求めることあると思つわそのときはよろしくね」

「本当ですか。じゃあ次回会いましょう」

『また』という言葉がうれしくもあつたのだが、内心は複雑極まりない。松宮には好きな人がいるという時点で俺の恋心は砕けたからだ。それでも松宮という女性との縁は切りたくないというのが俺の本音でもあつた。脚本家という職業しかり、天真爛漫な性格の女性という今まで俺には関りあつたことのない次元の人だから。

松宮は泣いていた。

いかんせん松宮の泣く姿を始めて見たのだから俺は混乱して当然。もしかして俺、変なことを言つただろうか?と思案しても何も出でこない。『もういい加減にしてくれよ!』? それだけで松宮が泣く

？考えられない。でも乙女心は繊細と訊く。やつぱり俺のせい？  
こういう状況の対処の仕方で小心者であるか否かがわかるというもの。俺はそう思つても、

「だ、だいじょうぶ？」

としか言えない。

「大丈夫じゃないわよ。女性が泣いてるのよ」と松宮口調は微塵も変わつていなかつた。ほつとした。けど当人が言うとおり女性が泣いているのだ。

「……次のやつ聞かせてもらえる？」

結局こんなことしかいえないので俺だつたということ。松宮は俺の手にあまり余るほどの女性で俺がなんとかできる相手ではなかつた。

「わかつたわ。次ね。次

とても嫌々な言い方だ。だけれども、何が理由かわからないが吐き出すものを吐き出して少しあは氣が晴れればいいと俺は願つた。俺には聞き役しかできないのだから。

松宮は自分自身を落ち着かせているようにゆっくりと煙草を取り出して火をつけた。葉っぱの燃える音が微かに聴こえた。

「タイトルはね、『うぐいすが鳴ぐ』

「『うぐいすが鳴ぐ』ですかなんか絶妙ですね。殺人事件つてついてないのがいい」

「でしょう。舞台は東京。主人公はデザイン会社に勤める』よ

「調子が戻ってきたのか松宮は続けて喋りだした。

「まあ、始めはあまりパツとはしない仕事ぶりなんだけど野心は十分にあるの。徐々に仕事運も上向きかなと思い始めたころ、プロジェクトを任されるわ。大口顧客相手で主人公もびびっちゃうんだけど、そこは持ち前の気の強さで乗り切つて仕事仲間と共に成功を勝ち取るわ。顧客も大喜び。そこで彼女は恋をするのよ。顧客の中の一人の男性にね」

お得意の恋の展開がきた。どこからミステリになるのかという喉

まで出てきた質問を俺は押さえこんだ。今は松宮に喋らせておくのがいい。まして、この話も今考えながら話しているのだろうからミステリ的因素を期待してはだめなのだ。『』は完全な聞き役に回ったほうが良いと俺は思う。

「男性は仕事も出来て優秀な一枚目。もちろんライバルも多いわ。でも主人公は仕掛けしていく。さて、恋の行方はいずこへ？」

松宮は俺を見つめてきた。一瞬どきつとしたのだが気を落ち着かせる俺。時々ある。諦めではあっても松宮の一つ一つのしぐさに心が揺らぐときが。

「主人公の仕事は順調で後は恋が実れば言うことなし！ってくらい。当然燃えるわね。ある日仕事の用事として男性の会社に顔を出しに行くの。訪問先の応接室に通されて待つ間胸がどきどきする主人公。まもなくドアが開いて男性が入ってくる」

\*

舞台初日の中演前、舞台ホールの応接室に入ってきた男性。そう、松宮が恋焦がれる俳優は俺と同じくらいか一、三歳くらい下だらう。外見はいわすもがなで一枚目俳優を地でゆく姿だった。

「今日からがんばってくださいよ」

松宮は彼に会うなり激励した。

「はい、がんばりますよ！松宮さんに言われなくとも自分の初主演ですし自分の役者生命かけてますから」

「うん、その意気！」

「で、そちらは？」

俺のことを見ついているのだろう。

「私の助手ね」

「助手！ということになつてているようだ。

「はじめまして。渡貫耕介と申します。以後宜しくお願ひします」

俳優は手を差し出してきて握手を求めてきた。俺も気のない返事

をしながら手を差し出した。

「なにその気の抜けた感じ。あんたちやんと挨拶しなきことよ」

「はじめまして日高です」

「どうぞ宜しく。こい本ありがとうございます」

「あああーあれば松富さんがね、書いた」

「あんたも手伝ってくれたじゃない。何言つてんの。ごめんね渡貫くん。いい奴何だけと人見知りがすごくつて」

「僕は何も…。それより、舞台終わつたら松富さんにて詞のチェックおねがいしたいのですが」

「私が？監督に訊けば？」

「いいえ、僕は光栄にも天下の松富さんが書いた本の役を演じているんです。主人公になりきらないといけないですし、台詞の言い方とか松富さんが思つてゐるニュアンスがいろいろあるとおもいますし」

「渡貫くんはすじこわ。ほれ、あんたもぼけつとしないでそのくらい仕事に身入れないといけないんじやない？」

「俺をいこようといじつてゐる松富。職業まで変えられたらもうどうでもいい。」

「まあまあ、松富さん。それより最終リハーサルのとき松富さん欠席されてましたけど？」

「ああ、あの日はちょっと体調が良くなくてね病院で検査をね」

「あれ、大丈夫ですか？それ、多分僕が思つにタバコの吸いすぎですよ」

「あー渡貫くんそれ言つちやう！」

「ははは、すいません。でもね吸わない僕からしたら松富さんって相当なベーブズモーカーですもん」

「ちゃんと私も自覚してゐるわよ。でもね、辞めようとは思わないのよねー」

「そこがベーブズモーカー所以ですよ。日高さんも吸われるですか？」

「え、俺？吸わないよ」

「そう、こいつも吸わないのよねー。煙をいやーな目で見てるもの」

「そ、そんなことないでしょ」

「あんたはそう思つてもね、体が無意識に反応してるの。ちゃん」と私見てるんだから」

「はーそう、そうなのか」

「いやいや、日高さん。そんな厳肅しないでください。吸わない者は堂々と吸つてる奴に言つてやつていいんですから。ね、松宮さん」

「わ、私に振る？もう」

松宮がふくれっ面をしたところで俺の緊張がやっと解け笑う」とが出来た。

その後に開演した舞台『水平線』を俺と松宮は見た。舞台設定は海岸。幕が上がれば海の水平線の場面から始まる。

主人公の青年が毎日海へ釣りに出かける。毎日餌も付けずに釣りをするのだから収穫はほとんどなかつた。それでも主人公は繰り返す。ある日親父がやってきて言うのだ。「俺はお前にとつて重要なものをこの海に捨てた。それをおまえが釣りあげてみる」とそして海岸で起こる様々な人と出会い。もちろん近所の子供役が出てきたがそれは『愛嬌だ』。

ある日主人公が海岸で佇む女性に一目ぼれをする。彼女はまた時々この海岸へやつてきていた。そしてその恋は実りそうですね違つていいくとこうお話。

俺が松宮に指摘したところが幾つか反映されていた。正直にうれしかつた。

「男性はこう言つわ『あたなみみたいな方とまた仕事ができるなんて

光栄です』つて。はつきり言つて社交辞令もいとこらなんだけど間に受けちゃつたりする主人公もいるわけ

「…」

「それから男性と主人公の付き合いは仕事上だけ続くな。ドラマに良くありがちだけびくつきそうでくつかないつてやつが繰り返される」

もう俺は何も言えないでいた。明らかに松宮の今喋つている話の主人公は松宮だ。男性はあの舞台『水平線』に出ていた渡貫。何と松宮に言えよいか正直俺は迷つていた。少なくとも松宮は今もまだ渡貫という役者が好きなんだろう。が、当の渡貫はいかんせん一枚目俳優だ。

「次のプロジェクトの打ち合わせがあると称して男性を呼んでみたりと忙しい毎日ね。それに電話しても仕事半分みたいなところあるわけ。恋にはまつた主人公はとうとう決意するわ。告白しようとしたね告白をするという決意がその主人公にあるということは知つていた。その結末も知つている。だがそれをあえてシナリオの案として松宮は記憶を思い起こして喋つている…。あえて全てを吐き出そうとしているのだ。

そうか、失恋からくる松宮のもやもやが今日の松宮の調子を狂わしていたのか。

「でもね、予想外の電話が主人公の今後を狂わせるのよ」

そこで松宮は間をわざととるかのように喋りを止めた。

\*

電話で呼び出されて、前回と同じ喫茶店へと赴いた俺を待つていたのは予想どおりとでもいうのだろうか、テーブルの上に分厚い冊子が置いてある状況。

「これ読んでみてよ」

挨拶も無しにまたそんな言い方もないだろうが！と言いたい気持

ちは抑えつつ俺は早速読み出したのだった。シナリオの書き方からすると今回も舞台のシナリオのようだった。今度は家族の絆に重点をおいたような松富らしいシナリオだ。

「意見聞かせて」

「うん、いいけど松富さん。今日はね、五時から会社の同僚と飲みがあるから…。今夕方だしね。」

「あら、そう。それならちょっとくらい遅れてもいいわね。で。どうだつた？」

と返すのが松富なんだ。俺は半笑いになつていた。

「なによ、可笑しいところでもあつた？」

「いや、そうじゃないんだ。シナリオはすこい良いよ。面白いし感動的だしさ。ただ何箇所か言わしてもらえれば…」

俺はまた前回のようになんか細かく自分の思ったことを言へ。そして黙つて聴く松富がいた。

「でさあ、一つ質問なんだけど、主人公の息子つてやっぱり渡貫さんをイメージしてる？」

「おっ！ 気付きましたか日高君。やっぱりイメージが合つてたでしょ？」

「まあ、その…。そうだと思つたんだよ」

もう松富の頭の中から渡貫君が離れないのだろう。それも仕方ないかと思いついてきた負けた負けたとは思つていたが、もう俺は完全に敗北宣言である。

「やっぱり舞台には華が必要だしね。適役はやっぱ渡貫君でしょう。あんたもそう思うでしょ？」

「うん、確かに彼ならいい演技するしね。人気もあるし」

「そう！ 今回は彼のスケジュール抑えるの苦労したみたいなのよ。田所さんがんばってくれて助かったわ」

「なんだ。もう人気役者か。テレビドラマとか出始めるんじゃない？」

「なればす」いわよね。まあ一彼なら主役張れるわ

渡貫君の話になると松富は生き生きとしている。そんな彼女を目の前にして俺はもう嫉妬という感情は生まれてこなかつた。むしろ応援をしたくなつてくる。

「松富は渡貫君に会つて今度の役について話し合つたかい?」

「いいえまだよ。まだ本が仕上がってないもの」

「ああ、でもさ、渡貫君が多分本を読んだら自分の役がいい役回り過ぎて喜ぶんじゃないか」

「喜んでくれればいいけど」

「大丈夫さ。ついでに告白しあわせえば」

「はあ?」

「告白だよ。松富は渡貫君のこと好きなんだろ?」

「や、それは…あんた勘がいいわ」

「ふふふ、伊達に年は喰つてないわ。応援するよ俺は

「あんたに応援してもらつてもねえー」

「えつ、俺じやあ」

「そ、う、あんたじや役不足。あら、つまここと言つたわ自分で自画

自贊

「なんだよそれ」

こんな会話をして松富はつきつきと浮かれてこるのがよくわかつた。是非がんばつてものにしてもらいたいものだ。

そして、ひと月くらつて経つてからまた松富から連絡があつて呼び出された。渡貫君との恋の行方が気にはなつていたが、あくまで俺は松富のシナリオ下読みという役割を持つていて。いつものようにシナリオを読み終わる。今回は前回のシナリオの完成版だ。はつきりこつて良い出来だと思つ。

「このシナリオよく出来てるとこつか出来すぎなんじやないか」

「へへん。どうよ」

こつもと変わらぬラフな服装の松富が煙草をふかしながら胸を

張つて自慢げに言つ。

「あんたの訂正も今回も不要かもね」

「やうかもね、でも一応幾つか言つておくよ、使うか使わないかはいつもみたいに松富が決めればいいんだから」

「まーあ。そりゃ そうだけ」

そして俺は本当に幾つかだけの指摘をし、本題へと移つた。

「で、渡貫君とまつまくこいつているの?」

「はつ?」

とこつて固まつた松富。よしー今回こそ松富にじきやふんと言わせられるような気がする。が、松富は冷めた感じで返して來た。

「ああ、その話。その話をきみはしたいの」

なんか松富が半ギレ状態だ。嫌な予感はすぐに当たつた。

「食事を誘つたらすぐに断られました! 渡貫君いわく、仕事絡みじやないと彼女に申し訳経たないつてさ。そう、彼女いるんだつて。そりやそつよねあんな一枚目を誰がほつとくのよ。私の出る幕はほんとになかつたつてこと。今までびおつ渡貫君との夢だけ見させていただいていいわ。終わり」

「あ、・・・」

「何よあんぐりと口開けちゃつてや。笑いたきや笑えば

「やうつすか」

「…。さあ、帰つた帰つた。もうあんたに用はないんだから。今日

もこれから用事があるんでしょう。早く終わつてよかつたわね」

残念ながら今日はまつたぐのフリーであった。でも予定があつたことにしよう。

俺は席を立つてそそくさと喫茶店の出口に向かうとき気になつて振り返つた。煙草をふかしながら外を見る松富。強い女性だと思つた。

それからしばらく音沙汰もなかつたが三ヶ月後、今日のドライブの誘いに至るのだった。

俺には何分もの間があつたように思えてならない。それだけ重苦しい雰囲気が支配していたからだ。でも実際は松宮が続けて喋りだすまで一分も満たなかつたのかもしれない。

「病院からの電話が掛かつてくるのよ」

病院だつて？今まで一度でもそんなシーンがあつたか？

「検査結果が出たから病院に来てくれないか？っていう電話ね

検査結果？

「主人公は翌日に病院に言つて検査結果を聞きにいくわ。診断は白血病だつてねすぐにも入院を勧めるという医師からの宣告よ」  
白血病！松宮が！俺は何かを言おうと松宮を見つめる。松宮は俺を見つめ返してくる。は松宮の目は堪えていると思った。今にも泣き出しそうな目だ。でも口調は変わらない。

「もちろん主人公はショックを受ける。でも恐る恐る訊くの白血病つて治るんですねって。医師はでもこいつの、もうかなり程度が進行している。ドナーが見つかなければもう半年と生きていないでしょとね。つまり余命半年つて宣告されるのよ」

「ちょっと待てよ。松宮！話が次から次へと変わりすぎさーもう少し経過を細かく聞きたい、んだが」「

「細かく？ちょっとあんた私の頭の回転についてこれでないの？」

嫌に冷静に松宮は言い返してきた。

「俺は…。そんなことないんだが。無理さーそんな急展開。観客がついて来られない

「あつそう」

そつけなく答えた松宮は再び煙草を取り出して火をつけた。しばしの間を俺は逃さない。

「松宮。どうして主人公が病気にならなくちゃならない？」

多分、松宮も俺の本心が何を考えているかくらいわかっている。わかっているんだがこういう質問しか俺は言えないでいる。松宮の表情は煙でうつすらと白く染まっていた。

「話の流れ、悪かったかしら？まあ、あんたがそう言つんだからそうなんでしょう。ああ、うん。いいこと思いついたわ。主人公はもともと病弱だったっていう設定にしておけばいいでしょう？」

「そんな適当に決めないでくれよ。そもそも、病人の設定が要らないんじゃないか？」

「要らない？ 要るわよ。これから話が盛り上がるのにあんたはしばらく黙つて」

松宮の皿がきつく俺を見つめている。思わず皿を逸らす俺は俯いて空のカップの底をのぞくしかなかった。

「あのね、主人公はそれから死を覚悟するわ。余命まで宣告されれば誰だつてそうなつちゃう。そして死を覚悟した主人公は強いの。憧れの男性。そう、仕事付き合いの男性にアタックするわけ。それはもう捨て身もいいところ…。

思わず自分に余命があまり無いことまで告白するわ。よく考えれば卑怯なのかもね。それでもその告白は功を制する。一夜限りだけれどもベットを共にする仲。主人公は当夜男性と別れるときに泣くのもうこれ以上ないくらいに泣く。止まらない涙。ちょうど雨が降り出し主人公の心境を物語っている場面ね」

痛々しかつた。俺は松宮に何て声を掛けるべきか。この場で真意を確かめる術は思いつかない。

「もう一步で主人公は死を選ぶような心境。罪悪感が頭をよぎる。そして数日後。仕事上でまた彼と会うの。とても気まずい空気の中プロジェクトは進んでいく。そういうしているうちに主人公は顧客に呼び出されるわ。

はじめは今回の仕事ぶりを褒めてくれるんだけど、次回も、その次も仕事がある。もし君でよければやってもらいたい。ただ。こちらも数多あるデザイントレーニング会社のうちのあなたのところばかりひいきには

していけない。それなりの物をもらわないと。つまり、顧客の男性は賄賂下さいっていつてくるの」

俺はもう話を聞きたくは無かつた。「松宮。判つたから今回のミステリのシナリオを書くという本題は忘れてしまおう」と言いたいのだ。でも、今喋っている内容はもうすでに過去の出来事だろつ。話を辞めたところで何も変わりはないのは明白だ。じゃあ黙つて松宮のそれを聞いていればいいのか?

「『賄賂』つていっても一概に金つていうわけじゃないよね。物だつたり名声だつたり体だつたり。主人公は本来そんな賄賂要求に応じるような人間じやないんだけど、何かがそうさせたのね。体を売つてしまつわ」

思わず俺は口を挟んだ。

「松宮の世界観じやないな」

「いいえ、今喋っているのは私なんだから、それは私の世界観なの喋つている内容は真実です。ともとれる発言を松宮はし、短くなつた煙草を揉み消した。また灰皿に吸殻が並んだ。

「松宮の言い分はわかつたよ。けど…」

「けど。なによ」

俺はここで松宮のそれを否定してしまつといけないと想い始めた。たとえそれがミステリではなくても今はミステリの話をしているのだ。いや、サスペンスか。

「なんでもない」

「ふーん。まああんたの意見は後々聞くわよ。まだ話終わつてないから続けるわよ。

主人公は体を賣ることによつてまた仕事を貰つことができたわ。今度はさらに一回り大きい仕事。もちろん成功すれば自分の名が有名になるくらいのやつ。意気込む主人公だけど、それも一時的で何もかも捨てたい気持ちが大きくなる。たくさん書いたデザイン画をくしゃくしゃにしたり、取材と称して出かけてもどこか別のところに行つちやつたり。そして仕事が進まないまま時は流れていくわ。

「そのまま白血病で死んでいくのを待とうかと無氣力状態が主人公を襲う。でも最後の力を振り絞って電話するのよ仕事仲間に」

「ここで松宮の言葉は止まった。

その間に合せるよつに俺は言った。

「出ようか」

あまりに氣のない言葉だらう。そう自分でわかつていても俺はこんなことしか言えない。

無言のまま立ちあがる俺と松宮。その氣まずい空氣をそのままにしてドライブインを出た。

帰路中何か松宮のために出来ることはないのか？そればかり俺は考えるようになり、助手席の松宮は流れる風景をただみつめている。市街地に戻つてくるといやがおつにも聴こえる街の喧騒がつらやましく思えた。

松宮と待ち合わせした駅前に舞い戻つた。俺は車を止める。

「今日は私のわがままに付き合つてくれてありがと」

長い沈黙を彼女は自ら破る。俺には出来ない。

「あ、ああ」

「結末考えとくわ」

「うん」

「じゃあね、田高」

助手席から降りて遠ざかっていく松宮の後ろ姿が小さく見えた。このまま松宮が俺の視界から消えればもう一度と日にすることはないだらう。そんな気がしてならないのにもかかわらず俺は運転席に座つたままだ。俺のふがいなさが爆発しそうだった。

「こんな形式ならば誰がどう見たって答えは一緒だと思い。不謹慎にもそんなことを考えながら俺は隣に座る入江とか言つ刑事に時間を見いた。

「もう六時だな。日が落ちるのも早くなつたもんだ」

「誰もが十一月ごろに言つセリフを吐き出した刑事。俺も同意しておいた。

俺は警察に任意同行されている。容疑はおそらく殺人だろ。今自宅から警察署までの道のりをパトカーが日の落ちて間もない繁華街に入つていく。

こういう結果が出たということは、どうやら俺の計画にはどこかに落ち度があつたらしい。まあそんな犯罪のセンスなんてもともと無かつたのかもしれない。俺はミステリを読んでて糸がつていただけだ。

「田高。たばこでも吸うか?」

入江は俺に煙草を勧めてきた。ケースから一本飛び出している煙草を見て田所の顔が浮かぶ。煙草＝松宮というイメージを持っていたはずなのに俺は田所の顔を思い出したということはよほど印象深かつたのだ。当然か、殺した相手の顔はしばらくは頭から離れないものなのだ。無意識の感情は俺思いと裏腹に動く。

そう。大概自分の思い通りにことは進まないものだのだ。ミステリの犯人だつて最後は名探偵に捕まる…。このじょぼくれた中年刑事が?俺は笑わずにいられなかつた。

\*

六本木のオフィスビルからの夜景、それはもう綺麗だ。その景色に一筋の白い煙が立つた。

夜景をバックにして煙草を思いつきり吹かす田所が目の前にいる。俺の追言に豹変し、急に煙草を吹かす。俺の問い詰めたことが本当

だという確証得た。

「君には関係がないだろう。何をどうようと私の勝手じゃないかね？それにむしろ彼女の方から望んできたんだ。何を躊躇することがあるかね」

そう言つて田所は少しだけ笑い。応接テーブルに足をかけた。今すぐにも殺してやりたい衝動が体を駆け抜けた。だが俺は抑えて言つ。

「松宮さんが望んで？それは無いでしょう。齎したのでしょう。仕事をやるからって」

「齎すだつて？私はそんなことした覚えは全くないがね」

「ちゃんと松宮さんから聞いているんですよ」

「どうせ嘘じやないのか？ああいう輩は気に入らないとすぐ変な事を言い始めるからな」

田所は一步も引かなかつた。もう何を言つても駄目だと確信した。そもそも期待なんかしていなかつたが。

「で、日高くんよ。部外者の君がそんなこと口を出してもいいのかね」「…」

「いい知らせがあると待つてればこんな話かね。はー何か善処してくれるかね。これからも取引したいんだろう？」

俺はスーツの右袖の中に忍び込ませておいた文鎮を握り締めた。

「…。こちらから取引の方は遠慮させていただきます」

俺は手の感触だけを頼りにして文鎮のベストの握り位置を確かめた。

「言つね。日高君も言つようになつたねえ。まあ君がそういうのならかまわんが」

俺は右手を大きく振り上げた。俺の右手を見上げている煙草をくわえた田所の顔がみるみる変化していくのがわかる。と、俺の眼と合つた。

ドン！と鈍い音が室内に響く。文鎮の先は田所の額を直撃したのだ。

ちょうど額の真ん中だつた。俺の運動神経もまんざらじやないと思う。口をパクパクとさせた田所がソファーと共に後方に倒れていった。

テーブルをゆっくりと廻りこむ俺はどこかの殺人鬼と同じだらう。大きなガラスの裏に映える夜景が俺を迎えてくれている気がした。

呻く田所に向かつて俺は一回目、二回目と文鎮を頭めがけて振り下ろす。まだ息があつたので四回目、五回目と降り降ろし、完全に動かなくなつた田所を確認した。

微かな異臭で吸いかけの煙草が絨毯の上でくすぶつてゐる。俺は立ち上がると夜景を望みながら煙草を靴で揉み消した。それから俺は大きなため息が自然と出た。

## 2

警察署に到着すると門衛の警官が興味深そうに俺を見ていた。受付付近は繁華街の警察署だけにたくさんの人がたむろつてゐる。こいつらも犯罪者なんだろうか？

「おーい。原田！」

俺を引っ張る入江が署内の奥に向かつて叫んだ。

「はい」

人の壁から抜けるように出てきたのは若い刑事だらう。

「一番に連れてつてくれ。調書取るぞ」

「はい」

「日高。また後でな」

そう言つと入江は入れ替わりに壁に吸い込まれていく。と同時に俺のつながれた両手が引っ張られた。若い刑事は動物の手綱でも引くようにして俺を先導するのだった。

程なく廊下に並ぶうちの一つのドアを開ける刑事に入れと合図さ

れ俺は中に入った。ドラマで見たような本当に簡素な取調室だった。

「コーヒーでも飲むか？」

意外にも俺に飲み物を勧める刑事。

「あ、ありがとうございます」

「そこに座つて待つてろ」

ひんやりとしたパイプ椅子の無機質な感じが、俺はさらに世間からはずれたのだと実感させられた。すぐに刑事は一つのカップを手に持つて入ってきた。

無言で立つたままの刑事。コーヒーで見えないカップの底を覗き込む俺。長い沈黙が続いた。

「おお、悪いなあ、遅くなつて」

入江が大きな段ボール箱を抱えて入ってきた。すかさず若い刑事が箱を受け室内の隅にある机に置く。

「じゃあ、はじめるか。田高。これから調書を取るがー。自由してくれるんだろう?」

今、嫌といえども興味があつたが、俺は頷く。もう俺の氣力 자체が失せている。

「よし。まず、被害者との関係だが…」

被害者、田所の顔を思い出す。性格や人柄を思い出す。俺は田所を殺した。文鎮で額を割つて、頭を割つて…。あの感触が甦つてくれるからこぶしに力を入れた。

けれどそんなことより、俺が田所を殺したこと。それが数時間前まで正しいと疑いもしなかった俺に腹立たしくてしようがない。田所を殺す前にあのイケメン俳優にまで会いに行き事の詳細を確認しに行つたのだ。なのに俺の行動は不正解だったと審判が下つてしまつた。

\*

一般客のように舞台を観賞していちファンのように俺はイケメン俳優を待ち伏せていた。楽屋に入つていく渡貫を遠くから確認して

俺は楽屋のドアを開ける。

帰り支度でマイクを落としている渡貫がこちらを向く。

「ああ、お世話になつてます。日高さん」

会つのは一回田だとこつてひやんと名前を覚えてこるとは本当にすいじい奴だと思った。

「どうも、今日、来ちゃいました」

「やつと来てくれましたね。松富さん」一人で観に来てくださつて言つておいたのになあ。別々に来るなんて仲悪いんですか？」

「…」

「ははは、冗談ですよ。で、日高さんどうおもこます？ いい舞台でしう？ 母親の、つて役の母親の方ですけど毎回演技じゃなくて本氣で泣いているんですよ。知つてました？」

「い、いや」

「本当にですから。松富さんと日高さんの成果つてやつです。前回のより評判いいんじゃないかな」

「それなら何よりだけど」

「毎回お密さん… そだなあ半分くらい泣いてるんじゃないかな。泣ける舞台つて巷じや専らの評判です。うん」

「渡貫さんの演技がいいからですよ」

「もう、日高さん何を言つんですか。僕なんてまだまだですか」

「あの、渡貫さん」

「なんですか？」

「これからちょっと時間作れます？」

「あー。ちょっと約束がありまして。また今度誘つていただけるでしょつか」

「やつ。それは残念」

「すいません」

謝る渡貫が席を立ち着替えるのだから。服を脱ぎ始めた。俺がいるのに勝ち構わず。

ああそつか。彼もつすすり気付いているのだろうと思つた。多分自

分のやつてしまつたことも自覚している。だからそわそわしている。

「あの渡貫さん」

「は」「

「松富と会いましたね」

「それは会いますけど」

「彼女何か言いませんでしたか？病気にかかっているとか着替えている渡貫はこちらに振り向かない。

「あなたが好きだとか」

まだ手を休めない渡貫。回りくどいのは駄目なのだ。俺は直球で訊く。

「もう長くないから一度でいいから抱いてくれないかとかちよひびきやケツに手がかかったところで止まり振り向いた渡貫。

「田高さんの」想像どおりだと思います。松富さんには一度僕に彼女がいるからと断つたのですが、それでもいいとせがまれ。さらに余命半年ということとまで告げられて…。僕にかなえられることをしようと一度だけ松富さんと寝ました。

もしそのことが松富さんの仕事や私生活に悪影響を及ぼしてしまつたのなら。謝ります。すいませんでした

深々と頭を下げる渡貫。彼は彼なりに松富のことを想つて行動を起こしたのだということを知らされて俺は何も言えない。むしろ「ありがとう」といいたいくらいだったが、俺にもそのときはプライドがあった。だから返した言葉は、

「もう会わないでくれ

だつた。

その後、俺は頭の隅にあつた計画を中心に移し変えた。俺のるべき行動が決まったのだ。念入りに練つた計画。ポイントは凶器と現場に集約される。機会があれば明日にでも実行が移せる。

入江の質問に頷き、警察の捜査力というものを実感していた。よくまあ俺のことをここまで調べていると驚いた。殺人を犯してから一週間しか経っていないのにだ。いつから俺をマークし始めたといつのか。そんな疑問が当然出てくる。

「凶器の文鎮はどこにある？会社にもなかつたが自宅からも出できていない」

凶器は判明しても発見はしていないらしい。それが唯一俺に残された砦か。しかし凶器がなければどうして俺が犯人だと警察に判つたのか。確かに会社の陳列棚にある大きめの文鎮を押借した。だけれどもそこに急にたどり着くことはできないだろう。いくらなんでも早すぎる。

「知りません」

「知らない？」

入江は俺が急に素直でなくなつたので強い口調に変わり始めた。  
「知らないわけがないだろう。お前がやつたんだ。礼状も出てる。  
おまえに見せたよな。言い逃れはできんぞ」

礼状は見た。確かに見せ付けられた。だから俺はもう捕まつたと思った。けれども凶器は無いという。それはそうだ。俺は名も知らないようなありきたりのよう用水路に投げ込んだのだ。簡単に見つかるわけが無い。では礼状は何を根拠に？

「俺はやつていませんよ」

「何言つているんだ！」

入江は俺の胸倉を掴んで引き寄せる。机の上に伏せられた俺。ありきたりだがこれもよくあるシーンだなと思つ。

「やめてください入江さん」

それを見かねて若い刑事は口では言うが何も行動はとらない。

「お前が被害者を殺した。もう判つてるんだ！」

入江の言つとおりだ。けれども証拠がなければ捕まる事もない。俺はこの刑事達にいよいよにやられてはいけないと思い始めた。

「ちゃんと田撃者がいるんだよ！現場のビルでな！」

「入江さん」

「お前はしてやつたりだと思っているかも知れないがな。ちょうどお前がビルから出でくるのを出勤直前の警備員が目撃しているんだよ！」

「入江さん！」

今まで壁に寄りかかつて見守っていた若い刑事は入江と俺とを引き離した。そして入江を睨んだ。

なるほど。これは言つてはいけない警察情報か。そうなれば俺の逮捕は現場のビルに居合わせただけのことと凶器に関連していたことそれだけだ。完全な状況証拠のみで俺を引っ張つたということになる。

「俺はやつていません」

また俺は言つた。刑事たちが困つた顔になった。

「おい日高。凶器はどこにあるんだ？俺はそれを知りたい。捜させてくれ」

今度は若い刑事が俺に訊いてきた。

「知らない」

「あんな、こちらはお前が犯人だと判つてる。くだらない意地を張らないでくれ」

「意地ではありません。不条理なことが嫌いなだけですよ」

「何をふざけたこと言つてるんだ。この！」

「まあ、入江さん抑えて。俺には日高こそ不条理なことしているとしか思えないんだが。どうして今更犯行を否定する？」

「一度でも肯定しました？」

「肯定はしていなくともほほ認めていたんだろう？自慢で」

「そうだったかもしませんけどね。言わせて貰いますけど、どうして俺が犯人だと？まずその根拠が知りたいです。凶器が会社の物

「…。わかつた。こちらとしては君の知り合いではないかとは推測しているが。ある人物から君の名が出た。つまり被害者の関係者からだ。君はアートサンに出入りしていたのだから被害者の部下たちは君を知つてはいたけれど、聴取をしても当初は名も出てこなかつた。だが、テレビ関係、舞台関係とでも言うんだろうかね。プロデューサーというのはその辺の人脈が多い。一人一人話しを聞いていくとある人物が君の名を出したのさ」

「なんということだ。それはもしかして」

「関係者は君のことを調べたほうがよいと強く要望したよ。こちらも半信半疑だつたが、試しに警備員に写真を見せたら君の顔を覚えていた。ちょうどビルの前ですれ違つたそうじやないか。いつも出入りしている業者の方だと証言した。もうこちらはあんたを徹底的にマークしたさ。あんたの勤め先のことを隅々調べると文鎮が無いという。それを受け死因の打撲痕は凶器が文鎮という可能性もあると鑑識の報告も取つた」

「わかりました刑事さん。ただ、一つ訊きたいことがあります。その関係者って誰ですか？」

「それを言うわけにはいけない」

「男性でしたか？それとも女性？」

「俺は刑事たちの表情を読み取ろうと必死だつた。教えてくれないのは判つていたが何かの確証が俺には欲しかつた」

「私は直接聞いてないですから知りませんね」

「若い刑事はそういうて突っぱねた。入江も無表情だ。だが何かを訴えているのが目でわかる。」

「俺はやつていません」

「三回目を使うことになるとは思わなかつたが仕方なつた。だがそれを待つていたかのように入江は言つ」

「女性だったかな？記憶が曖昧でね」

「有り難うござります。凶器ですが、近くの用水路に捨てました」

\*

六本木のオフィスビルから離れるときはさすがに胸が張り裂けんばかりだった。必死に人を殺した後の動搖を消すのに苦労した。松宮のためなのだと強い決心があつたにも関わらず揺らぐ。けれども俺は人を殺したのだ。

駅を降りいつもの帰り道は一層遠く重々しい雰囲気がし、孤独感を感じながら俺は早く家に帰りたかった。

途中袖口にある文鎮を用水路に投げ込んで家に駆け込んだ。玄関ドアに鍵をかけてもう誰にも会いたくない気分。衣服を脱ぎ捨ててきれいに処分すると俺は大好きな読書へと逃げる。なんてよい世界なんだろうと登場人物になりきっていた。

翌日の朝。会社で同僚と食事を取つているとテレビでニュースをやつていた。六本木のアートサン株式会社勤務の田所氏が遺体で発見されたというもので、殺人事件として捜査が開始されたというもの。

「おい、アートサンって日高の担当の会社じゃないのか」

「そ、そうだな、俺も驚いてる」

「すげえ世の中になつたもんだ」

「ああ、明日にでも顔出してくるかな」

そうは言つても俺はアートサンには近づかなくなつた。しゃしゃり出てボロを出すのを恐れていたというのもあるけれど、所詮アートサンに出入りする文具営業者に過ぎないのだ。わざわざ出向く必要もなかつた。それより気になるのはやつぱり警察の動きであつた。毎日欠かさず新聞は隅から隅までチェックしていた。事件の展開をつぶさに知る必要がある。犯人なのだから当然だろう？俺は田所を殺したんだ。ミステリに出てくる犯人じみた行動をとる自分自身に言い訳をせずにはいられない。

そして日々が過ぎていったある日。俺は会社から帰ると駅で買っておいた夕刊を早速チェックし始めた。政治面や社会面すべてに目を通す。ここ毎日やつている作業はやはり慣れてくるものだと樂観的な気になっていたとき田が止まる。文化欄に小さい写真だが松宮が載つていたのだった。煙草を手に持ち満面な笑顔で微笑む松宮。

「松宮…」

自然と名がこぼれてきた。俺は詳しく記事を読む。簡単で短い内容だ。

“今注目のシナリオライターがいる。先日クリエイトホール終演となつた「白身、零パーセント。君、百パーセント」前回の「水平線」ともにシナリオを担当した松宮さおりさん。ホールにほのぼのとした雰囲気をかもしだし、さらに泣けると評判の舞台を書き綴る女性だ。特に今回終演を迎えた「白身」は再演の問い合わせが殺到中らしく製作サイドも検討中のとの事。新作も待ち遠しい限りながら松宮さんはしばらく舞台の仕事は休み。これからはテレビ界に進出する。深夜のドラマ枠での活躍が期待される。”

俺は何か頭から鉄槌を落とされたようにしか思えなかつた。松宮があのドライブインで喋つていたことは嘘だったということか？眞実としても、現にテレビの仕事をするという松宮は成功を勝ち取つていいのだ。俺は松宮に嘘をつかれ勝手に思い込んだ俺は人を殺した。実際は松宮は悩んではおらず好んで田所に体を売つたという事実が俺には見えてくる。それならばあの余命の話も嘘かもしれない。嘘もりえるのだ。どうしてそこに考えが及ばなかつたのだろうか？俺はほんとうに馬鹿な人間だ。

「ピンポーン」

呼び鈴が鳴つた。

ドアを開けると見慣れない中年の男性、その後ろには制服を着た警官がいる。先頭に立つ中年男性は上着から黒い手帳を出して言つ。

「六本木警察署 入江と申しますが…」

俺はこの世のありよひを呪いたかった。

### 第三章

1

三月の陽気をほのかに感じ始めたのは鉄の檻の中。ここにいても少なくともまだ人間であると感じることができた。一時間前に面会に訪れた弁護士は今日がいい日になるように願うと、今日の裁判の希望的観測を俺に喋つていた。もつと現実的に喋つて欲しい。どうも弁護士とは馬が合わなかつたように思つ。今までに続いた一回目、二回目の公判は俺の主張の言い分の一つも出てこなかつた。所詮国選だけに期待はしていないのだが、これでは犯罪者も更正意欲がなくなるんぢやないかと思えるほどだ。

今日の裁判で全てが決まる。懲役が何年かと「う」とだ。凶器を用意したということで計画的犯行に落ち着いている。当然そのとおりなのだから仕方がないがどうやら死刑までは免れてはいるようだ。死刑を免れたからといって嬉しいわけではない。「そなんだ」としか思わない。ただ、松宮にまた会うことになるのだろうか。会えるのだろうかといふこそ根拠の無い期待が俺の糧になつてゐる。警察にある意味密告されたにも関わらず俺は彼女を好きなままでいるのだった。あの独特の喋り方と女性らしからぬ仕草と服装。正月過ぎに一度俺に面会に来た松宮の姿を想い浮かべる。当初顔を見たときには驚き怒りが込上りってきた。それなのに今は違う。会いたいのだ。会つて話をしたい。

\*  
面会だというから俺はてつきりあの好かない国選が来るのかと思つていた。だから面会室に入ってきたあの顔を見ると思わず立ち上

がつた。

アクリル板を境に面会室に入ってきた松宮は俺をチラ見すると  
「座れば？」

といった。固まつて立つている俺をほつたらかにしてさつさと椅子に座る松宮。俺は立つたまま松宮の表情を読み取ろうとするのだが、飄々とした見慣れた松宮がいる。

「どうして松宮が俺に会いに来るんだ？」

「仕事仲間だからでしょう？ 馬鹿じゃないあんた豚箱に入っている間に頭の回転がスローになつたわね」

「ふざけるな！」

俺は怒鳴つた。俺をからかいに松宮はこの拘置所まで来たのだ。  
「怒ること無いでしょう。それより座れば？」

俺は座つた。座つたのだが頭に血が上り興奮状態が続く。どうしてだ？ どうして松宮がここに来る。俺をうまく出し抜いて、利用して。邪魔者を排除させておいて、今はテレビドラマの脚本という仕事をこなしているはずだ。松宮にとつて俺はもう使用済みの廃棄物となつているはずなんだ。顔も見たくないはずだらう。

「はい、これ読んでみてよ」

松宮はアクリル板の隙間から冊子を突き出してきた。まだこんなことをしようとするのか松宮。

「もういらん」

俺は突き返すと続けて。

「松宮は立派なシナリオライターだよ。だから助言なんていらない。思いのままに書けばいいんだ」

「お褒めの言葉ありがとね。けど、これはあんたに読んで欲しかつたんだけどな。『鶯が泣く』」

ああ、あのドライブインで喋つていた話。俺は松宮を見る。松宮も俺を見返して、

「結末、読んでみてほしいのよ」

それを聴いて俺は手を伸ばそうとした。けれどその手は止まった。

「いや、俺はもうここよ。わざわざも言つたけど松宮の考へる結果は完璧さ。もうシナリオの『名人』だからな」

「…あんたうまいこというわね」

松宮節につい俺は笑つた。いつもの松宮が俺の目の前にいる。俺は丁寧に切り出した。

「もう俺に会いに来ないでくれ。連絡も取らうとしないでくれ。俺はもう必要ないだろ」

「あんたがそう言つのなら仕方ないわね。でも一つ言つておくわ。もう私シナリオ書くの辞めるわ。はつきり言つてこれが最後のシナリオになるわけ。もともと口高に会う必要もなくなるわね」

「辞める？辞める？なぜ」

「なぜって。あんたに言つたじゃない」

「ああ？ 聴いてない」

松宮は俺を見返している。少しの間のあとに

「まあーいいわ。あんたにわけを言つてもどつにかなるわけじゃないし」

「…。どうこいつだよ」

多分。そう多分。あの松宮が白血病で余命がないからか？もし本当にそれが真実ならば松宮に掛ける声もないだろ。でも、今日も変わらない松宮が目の前にいるのだ。

嘘をついている。

「松宮。また俺を騙そつゝて腹なんだろう。でも最後くらい俺にかつこつけさせてもらつてもいいだろ。正直に真実を言つてくれ。

『私はまだ死はない』って」

「あんた本当に勘が鈍くなつたわね。まあいいわ『私はまだ死んだりなんかしない』死んでたまるかって感じじよ」

笑みを俺に振りまいて最後に松宮は、

「もう会つことはないかもしけないけど口高、ちゃんと元気にしてろよ」

と言い立ち上がった。

松富の辞める宣言に妥当な解釈がもてないまま俺は今に至る。何とかして松富を説得してでも書き続けさせたい。俺が勝手に殺人を犯したこと悔いているのならそれを何とかして解いてやりたい。だからもう一度でいい。松富が俺の前に現われてくれたなら俺は役割を果たしてやる。

「トントン」

スッと開かずの扉のほうに田代が行く。もしかして誰かが面会?そう思ったのも束の間で

「もうそろそろ出発する。準備しろ」

という声が聞こえた。裁判所に行く時間らしい。今日ここを出ると裁判所で判決が出て刑務所に送られるだろう。東京から遠い刑務所なら松富に会える可能性がさらに薄れしていく。

警察官は俺に手錠を掛けて犬のように俺を連れていく。出入り口で待つているパトカーに乗せられると運転手がこちらを向いた。見たことのある顔だ。

「久しぶり田高。六本木署の原田です」

「ああ、どうも」

「落ち込んでいると思いまや、意外とすがすがしい顔してるな」

「まあ。私のやつたことは許されないことですから罰は受け入れます」

「やうか

原田は言い。パトカーを走らせて拘置所を出た。

それにしても刑事ってのはこんな仕事もあるのかと意外だった。さらにいえば原田は運転中ちらちらとミラーで俺の表情を盗み見ているのがわかる。何があると俺は思った。

程なくそれは的中し、原田は、

「裁判までは若干の時間がある。田高。ちょっと署の方に寄るぞ」

と言つ。なんだつて？そんなことが許されるのか？

「ちゃんと弁護士には言つてある。むしろその方がよことさえ言つてるからな」

俺の心理を先読みし、原田は答えてくれた。けれども、納得はできない。

「何があるんですか？」

弁護士を通しているから裁判で不利になるようなことはさせられないにしても、どうしてわざわざ警察署に行く？

「田高に会つて話をしたいという人物が来てるんだ」

もしかして松富が？

「異例だが弁護士も同意したし、検察も同意してる。俺もだ」

「どうしてあなたまで？」

「なんとなくだ」

それだけ言つと原田は警察署まで一言も喋らなかつた。

警察署へは裏口から入つた。物々しい雰囲気だと思いきや、しばらく廊下を進むと婦人警官の立ち話が響いてきた。

「おい！仕事」

遠くから入江の罵声が聞こえた。曲がり角を折れると入江が会議室の札の真下でしかめ顔をして立つている。

「入江さん。連れてきました」

「おー来たか。お待ちかねだよ先方は」

そういながら入江はドアを開けて入れと促す。俺はゆっくりと歩を進め部屋に入つた。

顔を上げると渡貫がいた。

「田高さんお久しぶりです」

思いつきり正装な彼はどこからどうみてもイケメン俳優だつた。

俺は頭をゆっくりと下げて礼をすると、

「日高さんそんなこともつづり辞めましょ。僕が日高さんに会いたかったのはね」

何が会いたいだ。松宮の仕事仲間だと嘯いたことでも責めるつもりか。はたまた、松宮に多大な迷惑をかけた僕を責めているのか。松宮さんのねドラマ、収録終わつたし放送前のビデオを観せたかつたからです」

「！松宮のドラマですか」

「松宮さんの希望です」

「…。『鶯が泣く』ですか」

「そうですよ。日高さんと一緒に考えたつて言つてました」

「あれは、松宮の考えた…。いいや。あれは、松宮の人生そのものがねトレースされているんだ」

「知つてます。松宮さんも僕にそつと言つてくれました

「松宮が？」

「はい。公表はしてないんですけど、僕にだけ。それにね。僕も出でるんですから」

「はあ？」

「僕は僕役ですけどね」

唐突なことが多い。俺が拘置所にいる間、松宮のシナリオが放送されているらしい。松宮が喋っていた内容がそのまま放送されるのか？

「となると…。どうこうことか…」

「まあ、観たほうが早いでしょ。さあ、そこ座つてください」

渡貫は俺を丁寧に扱うよじて椅子に座らせる。俺はまだ状況が飲み込めていながら、なんとなくわかる気もしていた。ビデオが廻り映像が流れ始めた。

「さあ、はじまりますよ

「渡貫君」

「なんですか？日高さん」

「松宮は、松宮は、どうなつた？」

「それはドラマの話ですか？」

「いや、今だ。ここには来ていないのだろう？」

「はい。ちょっと具合が悪くて」

「病気、本当なのか？」

渡貫は田を見開いて俺を見つめ返してきた。

「本当ですよ。やっぱり、田高さんが信じていなかつたんですか。松富さんが言つてました。田高さんがまだよくわかつてないつて「病気は本当。それならば俺は今まで何を考えて生きていたのだ！松富は死ぬんだ。松富が死ぬんだ。だから書くのを辞めると言い。だから松富は泣きながら告白し、だから手術の名人ブラックジャックを持ち出した。すると、余命半年。あれから半年が経過している。松富はもういないのか？」

「渡貫君。その、白血病の余命はいつまでなんだ！俺が聞いたときは半年と…それならばもう…」

「田高さん。白血病で松富さんが死んじゃうと…どうでそんな勘違 いしてるんですか。本当の病名は肺癌なんですよ。今はもう、病院に入院してるんです」

「肺癌だって？松富は一言も言つていない。確かにあの時に松富は白血病だと言つていた。

「肺癌。なのか松富は」

「はい、残念ながらそれももう手遅れなんです…」

俺は自分を責めた。要するにあのドライブインではじめに語つた話『煙草殺人事件』がもう松富の心境を写していた。それに気付きもしない俺。あの時から俺の振舞う行動は間違いだらけだった。

ちょうど流れているドラマは主人公の女性と一人の男がドライブインにさしかかったところだった。当時の一言一句忘れてはいけない。「煙草無いんだけど…」

「知らないよ。店に売つてるんじゃないか？」

「もしかつたら？」

「…。わ、わかつたよ」

何か不思議な気分だつた。撮影場所まで一緒だつたからだ。そして二人はドライブインに入つていく。

渡貫は突然立ち上がり入江に向かつて言ひ。

「刑事さん。もう一度田高さんを松富さんに会わせてあげて頂けないでしょくか？」

深々と頭を下げる渡貫に入江は戸惑つがすぐにこう言った。

「残念ながらできん。もう裁判は始まる。寄り道で病院に行くことなどできぬいよ。なんなら田高。手紙でも書けばいいんじやないか？」

入江も事の詳細を知つてゐるんだろう。その提案はシナリオライター松富に対する最良の手段なのかもしれないと俺も思ひ。そうだ、最後に俺の手紙を松富に下読みさせるのも悪くない。

「そうですね。そうします」

俺は返事をした。渡貫は納得していないようだが俺はこれでよいと思う。松富に何もできなかつた俺。松富に会つ資格など元からないのだから。

ドラマの最終話が流れている。主人公の言ひセリフが耳に残る。

「そして刑事は言つのよ。『煙草はやめたほうがいいなあ』ってね」身にしみる言葉だ。そのセリフを聞いたとたんに涙が出た。

ドラマの内容はまさしくあのドライブインの会話が再現された。ただ違つところがある。それが松富の考える結末だつたのだろう。

本当ならば最後に俺が店を出ようかと促しているはずだが。松富は俺にこう言った

「このまま白血病で死んでいくのを待とうかと無氣力状態が主人公を襲う。でも最後の力を振り絞つて電話するのよ仕事仲間にすべてを告白した後主人公は言つわ『私はまだ死んだりなんかしない。死んでたまるかつて感じよ』」

そして強がる松宮はまた煙草をくわえた。

3

もうすでに一年の刑務所暮らしが続く。それでも松宮のことを忘れた日はない。これからも忘れる事はないだらう。

判決後、すぐに俺がしたためた手紙がある。

松宮へ

この手紙を受け取つて驚くだらう。むしろ宛名の段階で、今この行を読んでいる段階で捨ててもらつてもかまわない。けれど最後の俺のお願いだ。松宮が俺に散々書きかけのシナリオを読ませたかのように、俺もこの手紙を松宮に読ませたい。どうか最後まで読んで欲しい。

まず、数々の無礼があつたことをお詫びする。松宮のことを思つての俺の行動が裏目に働いて多大な迷惑を今もかけていふと思うと俺はいたたまれない。すいません。

それと松宮がこの手紙を読んでいるときにはもう俺は遠くの刑務所にいるだらう。どこの刑務所にいるかどうかは今これを書いている俺も知らない。こちらからは連絡をとることもないだらうから会うことすらもうない。

さて、松宮に初めて会つたとき、俺は振り回されてばかりだつたが楽しかつた。その後にシナリオを見せてもらつまでの仲になるとは思いもよらないから俺はさらにつれしかつたんだ。

松宮は俺をどう思つていたかは知らないが、俺は松宮が好きだつた。

「つ恥ずかしいとか言いそうな松宮が目に浮かぶ。

暫くしてイケメン俳優に夢中になる松宮も俺は好きだつた。失恋し

た松宮はそれでも強くすばらしい人だと思つたよ。松宮は俺の持つていなものを持つてゐる最高の友だ。

けれども、俺は松宮の力にはなりきれなかつた。松宮の言つとおり俺が馬鹿だからだ。

ほんとうにすまん。

そして最後に望むのは松宮が肺癌であるうとあきらめないでシナリオを書き続けて欲しい。結末は『死んでたまるか』だろ?

松宮ならもう次のシナリオ書いているかもな。野暮なことかもしれないがシナリオの下読みはもうしないよ。

松富さんがんばつてください。

日高

この手紙は松宮の余命には間に合つていない。

了

## 名人（後書き）

「べど」のようですが「了」です。

一話完結の形としてあります。

「」感想承ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2437d/>

---

名人

2010年10月10日16時07分発行